No. 12（2015. 3）

武庫川女子大学
武庫川女子大学短期大学部

FDニュース

第12号

● 目　次 ●

〔1〕教育の質的転換を目指す新たな授業改善の取り組み
〔2〕FD 推進委員会の活動報告
　1　「能動的学修の教員研修リーダー講座」に関する勉強会　開催報告
　2　電子黒板を活用した授業改善討討会　開催報告
〔3〕シリーズ授業
〔4〕編集後記

教育の質的転換を目指す新たな授業改善の取り組み

教育の質的転換の柱の一つである能動的学修（アクティブラーニング）については、本学においても授業への活用が進められています。これを更に推進するには、能動的学修の効果的に実践できる教員を養成する必要があります。この度、一般財団法人全国大学実務教育協会主催「能動的学修の教員研修リーダー講座」に教育研究所 寺井朋子助教が参加されました。

能動的学修の教員研修リーダー講座に参加させていただいて

教育研究所　助教　寺井　朋子

今回、全国大学実務教育協会の主催によって行われた講座に参加させていただきました。この講座の目的は、大学における能動的学修への転換と教員としての実践力の必要性について理解し、実践力を高めるための技法を学ぶことでした。研修は、能動的学修の基本となる技法を学ぶ第１回、授業をデザインして具体的な活かし方を学ぶ第２回、年間の学修プログラムを視野にいれて行う第３回から成り立っていました。一番の特徴は、講座自体が演習や討議を行う体験型であり、能動的学修を実感できるものであったことです。１日のスケジュールは細かく決められており、第１回講座だけでも、インタビュー法による班のメンバー紹介、事前課題のグループ討議、講義、ワールドカフェ、事例研究、ブレーンストーミングなどと続きました。30名の参加者は初日から座席が指定されており、６名の班（A 班～ E 班）に分かれて受講しました。３回とも同じ班でしたが、教室内の班の配置が毎回変わるなど、班の作り方と運営方法にも能動的学修の技法が組み込まれていました。このように多くの演習を通じて、各班の連帯感は次第に深まり、休み時間にも課題について話し合うようになっていきました。これは、学修意欲の向上を明確に意図した受講環境が設定されていたためだと思います。

また、全ての講座は事前学修を前提として構成されており、第１回講座の前には130頁以上のテキストが送付され、理解促進テストの回答が必須となっていました（第１回講座では更に80頁のワークシート集と270頁の資料集が配布されて驚きました）。事前課題は段階的に難しくなり、第２回講座の前には授業１コマ分の授業計画作成及び実践をし、第３回講座の前には、全学の学修目標との関連をふまえた上で能動的学修を取り入れたシラバスと評価方法を作成しました。このような事前学修を行う中で、授業を行う上では、授業だけではなく事前・事後学修も含めた授業計画を作成することが大切であると感じました。

最も印象的だったことは、学修者の能動的学修への参加を取り入れた授業は、事前学修と授業を通じて学修者自らが学びを深めていくという実感でした。私自身、能動的学修については、一般的な意味や方法程度の知識を持って講座に参加しましたが、極めて実践的な講座を受ける中で、知識と実践の融合を学んでいったと思っています。そして、班のメンバーとディスカッションし、班の意見をまとめて発表する形式の中で、知識と実践をつなぐ知恵のようなものも学べたのではないかと思っています。講座では、資料、授業内での時間配分、課題と授業の整合性、ディスカッションを深めるための工夫、必要に応じた文具類など、参加者の気づきを促すさまざまな仕組みが用意されており、これも大きな学修成果であったと感じています。

「学修形態を転換していく上で苦労していることや楽しんでいること」に関するまとめ

現段階での私の課題は、この成果を活かして学生のみなさんが自発的に学ぶ環境を設計できるのかどうかの自らの展開と、これらの知見を他の先生方と共有しながら武庫川らしい教育とは何かを見出すことであると思っています。能動的学修は学生との相互作用の中で力動的に作り出されるものです。固定的に考えず、絶えず改良し続けていきたいと思います。

修了認定証を手にして、班で記念撮影

〔日時・場所〕	第１回	平成26年８月30日（土）	いずれも９：30～17：30
	第２回	平成26年９月27日（土）	於：アルカディア市ヶ谷
	第３回	平成26年10月25日（土）	（東京都千代田区九段北４－２－25）

FD 推進委員会の活動報告

〔「能動的学修の教員研修リーダー講座」に関する勉強会〕

先生方の授業改善の参考にしていただく機会として、寺井朋子先生が参加された講座の勉強会を開催しました。

日　時：平成27年２月20日（金）16：30～18：30
場　所：中央図書館６階　ラーニングコモンズ　C-601
参加者：教員８名（４名×２グループ）
内　容：以下の通り

セッション１：勉強会の説明とインタビューによるメンバー紹介　（25分）

講師の寺井先生から、勉強会の目的が「能動的学修講座で紹介された学びの技法を体験する（学生の視点）」と「大学教育を能動的学修へと転換するための問題点を整理する（教員の視点）」の２つであることが説明され、勉強会が始まりました。

４人のグループの中で２人１組のペアを作り、相互にインタビューを行い、グループメンバーにインタビューの相手を紹介しました。このことにより、和やかな雰囲気とこれから始まる研修への期待を持たせる雰囲気がつくられることを体験し、アイスブレイクの目的を理解しました。ペアワークとグループワークがどのように出来て、どのような気づきがあったのかなど、セッションの振り返りも行いました。

セッション２：能動的学修の実践についての学び　（25分）

次に、資料にそって大学の単位制度、大学教育の質的転換方策、大学教育の特質等について解説され、能動的学修の実践について学び、ミニテストに取り組みました。ミニテストは、配付資料を見ながらまず個人で解答し、その後４名で討議してグループ解答を作り、答え合わせをしました。グループ解答の利点は、全員の参加を必要とすることや解答を作成する中でお互いに教え合いが出来ることです。グループ活動は、事前学習の促進への活用も考えられますが、実際の授業においては、どの学生もが積極的に参加するための時間配分や問題の難易度の設定、班分け等が課題であるとのことでした。

セッション３：ペアインタビューとカード化　（50分）

『「能動的学修」へ授業を転換するにあたって困っていることや楽しみなこと』をテーマに、２人１組のペアインタビューを行った後、インタビュー結果を一つずつカードに書き出しました。次に各自が作成したカードを４人のグループで持ち寄り、親近感を覚えるカードを一か所集めてホワイトボード上でグルーピングしていきました。それぞれの内容を集約して表札を付け、反対の関係（⇔）と因果関係（⇒）を矢印で示し、一目で関係性がわかるようにしていきました。

セッション４：グループ発表とまとめ　（10分）

セッション３でまとめた内容を各グループの代表が発表しました。能動的学修への転換の課題として「教員の能動的学修への理解が乏しく自信を持って導入出来ない」「受動的な学生がいるとグループディスカッションの雰囲気が壊れることがある」などが、反対に良いこととして「同世代の意見を非常に熱心に聞く学生を見るのは楽しい」「文章力、スピーチ力、ディスカッション力等で学生の成長がはっきり見える」などが意見として発表されました。

最後に能動的学修実施のポイントとして「学生と作る」「時間配分も含めて臨機応変にする」「配慮が必要な学生への対応（逃げ場を作る必要性）」「成績評価の問題」「試行錯誤しながら改善していく」「授業の中で発言した内容は教室外で問題にされないという安心感のある雰囲気作り」などと「取り組みを活性化していくには自分一人で考えるのではなく、教員同士がお互い仲間という意識で悩みや情報を共有していくことが大切である」ことを共通認識して勉強会が終了しました。

参加者自身が能動的学修を行い、効果を実感してそれを実際の授業にどのように活用していくことが出来るかを考察する今回の方法は、能動的学修をより深く、具体的に理解出来ると思いました。また、寺井先生ご自身が講座で学んだことを授業で実践された際の気づきは、どの先生にとっても授業改善を図る上で非常に参考になると思いました。今回、専門分野も年代も様々な先生が参加され、普段の授業での問題点などについて切り込んだ議論が行われていました。参加された先生からは「教員が自ら体験することで理解が深まった」「他学科の先生方と授業の悩みを話すことができ、参考になることが沢山あった」「もっと多くの武庫川の先生が積極的に参加することで大学としての授業改善が進む」等のコメントが寄せられるなど、大変有意義な勉強会になったと思います。

教員が情報を共有し、連携体制で授業改善を図ることは、大学全体の教育の質の向上に直結するものだと思います。FD推進委員会として、このような勉強会・研修会を更に充実させていきたいと考えています。

（FD 推進委員　情報収集・広報ワーキンググループ　田中　邦子）

〔電子黒板を活用した授業改善討論会〕

中央図書館６階のラーニングコモンズ４室（C-601～604）と9階のゼミ室３室に、パナソニック社製の電子黒板が７台設置されました。これを受けて、FD 推進委員会では「電子黒板を活用した授業改善討論会」を下記のとおり開催しました。

日　時：平成26年12月10日（水）16：30～18：05
場　所：中央図書館６階　ラーニングコモンズ　C-604
内　容：開催挨拶・説明者紹介（FD 推進委員会 三浦 秀松副委員長）
　　電子黒板の使用方法説明（パナソニック 仁尾氏、磯道氏）
　　電子黒板の利用体験・グループ討論（４グループ）
　　グループ発表
　　総括・閉会挨拶（FD 推進委員会 三浦 秀松副委員長）
参加者：教員14名、事務職員４名

パナソニック 仁尾氏、磯道氏より電子黒板の使用について、配付されたマニュアルに沿ってデモンストレーションがありました。主な機能として以下のようなものがあります。

・電子黒板（大型モニター）の入力選択により、電子黒板のディスプレイをホワイトボードとして使用できる。
・ディスプレイは付属ペンや指先によるタッチ操作が可能である。またスマートフォンのように指で操作対象をつまむようにして画面を縮小する（ピンチイン）ことや、指を広げるように動かして画面を拡大する（ピンチアウト）こともできる。

・Microsoft Office2013をインストールした講義用 PC を併設しているので、ノート PC 等を持参しなくても、作成した資料を保存した USB メモリ等を接続するだけで PowerPoint のスライドショーができる（連携モードにするとスライドショーを行いながら、スライドに直接描画できる）。
・外部機器接続パネル・ブルーレイ／DVD プレイヤーを接続すると簡易マルチメディア設備として使用でき、予め準備した画像や動画等の資料を投影することができる。
・パソコンの画面や音声をワイヤレスで送信できるアプリケーションソフトを用いることで、複数デバイス（最大16台）の画面を同時投影できる。（別のアプリケーションソフトを準備すれば、タブレットやスマートフォンからもワイヤレス送信可能。）
・講義用 PC には CyberLink Media Suite11（マルチメディアコンテンツの再生、編集等を行うソフトウェアをまとめた統合パッケージ）がインストールされており、動画再生の他、授業中に電子黒板に描いた板書内容の録画や授業中の声の録音、再生も可能である。

次に、参加者は４グループに分かれて電子黒板の操作を実際に体験しながら授業への活用方法について討論した後、各グループから討論内容を発表しました。主な意見、感想は以下の通りでした。

・モニターの大きさを考えると、大教室よりも受講生40名くらいまでの少人数の講義に適している。
・グループディスカッションやプレゼンテーションツールに適している。
・現時点では電子黒板（７台）が導入された教室での使用に限定される。
・既に多くの小学校で電子黒板が各教室に設置されている。学生は教育実習に行く前に、電子黒板の使い方をマスターしておく必要があるため、大いに活用したい。
・電子黒板のヘルプ機能が少ないので、使用マニュアルを熟読する必要がある。教員としては、電子黒板の活用事例報告（映像）が欲しい。

今回の討論会で、双方向授業を行う上で、電子黒板は有効なツールであることを学びました。今後、電子黒板を使用していきたいと思いますが、活用するにあたり、さらに準備が必要だと思いました。電子黒板を活用した事例報告を聞き、電子黒板を使った有効な授業法を勉強していく必要があると感じました。

（FD 推進委員　FD 研修ワーキンググループ　堀内　理恵）

シリーズ 授業

アクティブ・ラーニングで創る絵本の世界

日本語日本文学科
日本語文化学科
講師　設樂　馨

図書館６階アクティブ・ラーニング・スタジオを使った司書課程科目「児童サービス論」では、公立図書館が担う乳幼児から高校生までの発達段階に応じたサービスを学びます。図書館は、少子化と高度情報化のなかで生涯学習施設及び、情報集積地として機能します。本学司書課程では司書を「メディアファシリテーター」と位置づけ、新たな司書育成を開始し、教育手法も課題解決型のアクティブ・ラーニングを取り入れました。講義と演習で授業回数３分の１程度を終えたところで、学生に「子どもたちに図書館は楽しいところだよ、役に立つよ、と感じてもらうにはどうする？」と問いました。

アクティブ・ラーニングに必要な仕掛け１）課題は具体的に絞り込む

学生が立案して取組む課題は、教員が進捗管理できるものとします。少人数ならまだしも、本科目は必修単位で１コマ約80人、２コマで計158人の履修者がいます。今回は、幼い来館者が「わーっ、ここ、楽しそうなところだ！」と感じてくれるものを展示する、見てすぐわかるもの、としました。

アクティブ・ラーニングに必要な仕掛け２）学生の個性を尊重する

計画の不具合や進捗管理にまで気を配るのは、一人では難しいものです。そこでグループワークをするのですが、司書課程は他学科・大短合同のクラスで互いを知らない場合もあります。そういうときは、チームビルティングの時間を作ります。チームビルティングとは、メンバー個々の力を発揮するために、リーダーシップ、マネジメントなど、それぞれの人物が持つ能力を探って意識的に組織創りをすることです。といっても、グループごとに一列に並んで風船を落とさず歩く、自己開示できる話題を振っておしゃべりする（自分を文房具にたとえると何か、それはなぜか）などゲーム感覚で負担の少ないことに取組みます。今回は２～８人程度で計32グループに分かれました。

アクティブ・ラーニングに必要な仕掛け３）決定はその場、その瞬間に

PDCA サイクルで計画、実行と進むにつれ、グループでの話し合いや作業が間延びしやすくなる、という傾向があります。期日を厳守させるには、中間発表や宿題も一つの手段ですが、完遂のため削減・修正できる手順はないか、作業人数を増やして解決できないか、というように評価と改善を促します。先に終わったグループや欠席（公欠）していてグループに入りにくい学生を見つけて協力要請する、手段や道具を簡素化するなど、決定を先延ばしせず、その場で解決させるよう、教員が学生を観察し、積極的に学生に関わっていくことが必要です。

今回は仕掛けとして３点、挙げました。学生の協働で学びを深めるアクティブ・ラーニング。学生の解は「ぐりとぐら」のカステラ、「ヘンゼルとグレーテル」のお菓子の家、見上げるほど大きなトトロやはらぺこあおむし、図鑑で調べたくなる動物のシルエットなどなど個性豊かで評価も楽しいものとなりました。評価後、一部の作品は附属保育園や保育ルーム「ラビークラブ」に引越したので、読者のなかには知らず知らずご覧になった方がいるかもしれませんね。

編集後記

先日、NHK クローズアップ現代「地方から日本を変える～宝を生み出すつながり力～（2015年１月６日（火）放送）」を見た。地域に密着した他の企業と連携し、魅力あるブランドとして全国展開に成功したある老舗商店を継いだ社長のドキュメンタリーである。かつての赤字経営から脱却し、不況をものともしない躍進をとげているようだ。魅力ある地方の企業の社長として、今や起死回生をはかる中小企業からひっぱりだことなり、経営立て直しを支援するために全国を奔走していた。

その過程のなかで印象的だったのは、「何をやりたいのか」という根本的な問いをひたすら当事者たちに投げかけ、個々の夢の実現を具体的にイメージできるまで深めようとする姿勢である。これはまさに「主体的に考える力」をひき出す、人材育成の“ミラクルクエスチョン”ではないだろうか。

（編集委員 K.M.）

【FD ニュース編集担当：情報収集・広報ワーキンググループ】
松本　佳久子、塩出　雅、藤井　達矢、藤本　憲一、田﨑　祐生、田中　邦子